

走るとは人間本来の営み 世の中が変化しても決して廃れない

オリンピック選手の指導経験がある実業団のプロコーチが市民ランナーを直接指導する本格的なランニングクラブ「ニッポンランナーズ」を設立してから23年の歳月が経過した。

高橋尚子さんがシドニーオリンピックの女子マラソンで日本人初の金メダルを獲得し日本中が熱狂した2000年の暮れ、突如会社から活動休止(事実上の廃部)の宣告を受けた。20名近い選手やスタッフの将来や自らの生き方などを悩んだ挙句、独立してクラブチームを立ち上げる決意を固めた。決意はしたもの、前例も経験もない。翌01年はあらゆる書籍を読み、あらゆる人からの意見を聞くため東奔西走した。その中の一人が『月刊ランナーズ』の下条由紀子編集長(当時)である。

忘れもしない、その年の9月11日「アメリカ同時多発テロ」

が起きた。ニューヨークの貿易センタービルに激突する旅客機の映像をみて戦慄した。世界がその先どうなるかさえも分からず不安しかなかった。

そんな暗い年を乗り越えた02年、NPO(特定非営利活動法人)という形で千葉県佐倉市に総合型地域スポーツクラブを設立した。総合型地域スポーツクラブは当時、国が積極的に推進していた枠組みで、スポーツを部活動から地域クラブへ移行する受け皿になるはずだった(部活動問題は23年経った現在も解決には至っていない)。とりあえず器ができたが、中身はまだ何もない。数人のスタッフとクラブの会員募集に奔走した。

春に開催した記念すべき第1回練習会の参加ランナーはわずか5名だったと記憶している。少しずつではあるがクラブの規模は大きくなり、バレーボール



きん・てつひこ
プロランニングコーチ。今号には2002年の連載「金哲彦のサブスリー道場」も掲載

部門や野球やサッカーなどいろいろなスポーツが体験できる小学生の「土曜スポーツ体験隊」などに拡充していった。以来、多い時は500名を超える会員を有するクラブに成長していったが、資金繰りや雇用の問題はいつまでも続いた。

市民ランナーの世界は07年に始まった「東京マラソン」から大きな変貌を遂げた。エリート選手と市民ランナーが一緒になった日本で最初の大規模都市型マラソンだ。やがて、東京マラソンを手本に全国各地の自治体主催となったマラソン大会が新設。大会ができた地域を中心にランニング愛好家の数が増加した。いわゆる「ランニングブーム」の到来である。

同時期にスマートフォンが誕生し、情報のほとんどは紙メディアからデジタルで入手する時代になった。コミュニケーション

ンの手段もネットを介したSNSが主流となった。

ランニングの世界でもYouTubeで情報発信するスタイルが当たり前になってきた。群雄割拠のインフルエンサーやプロコーチがフォロワー数と再生回数を毎日競い合っている。もはや、地域密着のローカルなランニングクラブは「オワコン」かと思ふことがある。

2020年、コロナ禍のとき多くの飲食店やスポーツクラブが倒産の危機に見舞われた。しかし、あきらめなかった組織はその後コロナ禍以前と同じように営みを続けている。順風満帆とはいえないがニッポンランナーズも23年間その形を変えながらも毎週欠かさず「走る」と「教える」ことを続けている。

世の中が変化しても決して廃ることのないものが幾つかあるだろう。そのうちのひとつが走ることだと信じている。それぞれの価値観で走り、走ることを通じて絆が深まる。走るという人間本来の営みが人生を豊かにする。やや古臭く汗にまみれた理念のタスキではあるが、次の世代にしっかり渡したい。



選手、コーチ、クラブ設立 「ランニングは 私の人生そのもの」

金哲彦（ランニングコーチ、解説者）

早稲田大学時代は4年連続で箱根駅伝5区出走。卒業後はリクルートに入社し、1987年に別府大分マラソンで3位。その後ニッポンランナースを設立し、プロランニングコーチに。マラソンや駅伝のTV解説も多数行う。

ランナーたちの存在証明というテーマでランナースに掲載されたのは30歳そこそこ

でしょうか。選手を引退して実業団女子ランナーのコーチングをスタートしたばかりの生意気な若造でした。小出義雄氏とい

う日本を代表する指導者のもとで素晴らしい経験をさせていただき、今でも感謝でいっぱいです。選手としての自分探しから

コーチングに転換するとても大切な時期だったと思います。

その後、市民ランナーを指導するクラブチーム「ニッポンランナース」設立にあたって企画書を手を下条編集長にご挨拶に伺うと「実業団の監督がこんなことをするのは決まっています」と、すぐに連載が決まったことを覚えています。

物心がついた少年時代「遊び」として「特技」の一つとして走り始めた人生。その後は縁あって競技選手、コーチ、市民ランナーとしてずっと走り続けてきました。市民ランニングクラブの立ち上げ含め、ランニングに関わることはほぼすべてやっているのではないかと思います。最近返す返すも思うのは、私は

走るために生まれてきたのではないかと。60歳を過ぎた今でも走るたびに新鮮で飽きることはない「ランニング」は私の人生そのものと言っても過言ではないでしょう。

戦争が終わり復興の象徴として開催された東京オリンピック。その後始まった市民スポーツと健康指向のライフスタイルが日本に芽生えました。その真つ盛りの時期に創刊し半世紀にわたり日本のランニングシーンを牽引してこられた『月刊ランナース』の実績と存在感は素晴らしいものでした。

現在、世界秩序の混乱、国内では少子高齢化など課題山積ではありますが、ランニングは世界の人々をつなぐ平和の象徴であり、走る人一人一人の心と身体健康維持に寄与する大切なライフスタイルです。次の50年（100周年）に向けてさらに発展することを祈っています。

※1994年1月号で
本誌初登場

